図220　遺跡の概略位置
5万分1地形図「新潟」

図221　昭和43年の発掘調査　個人提供

出山遺跡　北区太郎代

海岸砂丘の海浜近くに立地する、奈良時代の製塩遺跡である。標高は海水面と同位～数メートル上で、遺跡の上には八メートル余りの砂丘砂が形成されていた。昭和四十三（一九六八）年、新潟東港中央水路の開削工事で発見され、翌年、新潟県教育委員会が遺跡の一部を緊急発掘調査した。開削工事では何か所もの製塩遺跡が発見されたが、発掘調査されたのは出山遺跡だけであった。出山遺跡周辺は、現在、東港中央水路になっている。

古代の製塩は、海水を土器で煮詰める土器製塩という方法で行われた。製塩作業には、日常生活で使われることのない専用土器（製塩土器）が用いられた。越後で土器製塩が開始されるのは、須恵器・鉄の生産開始とほぼ同じ八世紀初めごろと考えられている。

出山遺跡の製塩土器は、高さ一六センチメートルほどの身が深いコップ状の、国内で類例が知られていない形であり、「出山式製塩土器」といわれる。遺構は、砂地を直径一メートルほど掘り窪め、下に器台を幾つか並べ、製塩土器を載せて火を焚いたとみられる製塩遺構だけであった。遺構周辺は、製塩作業を終えて

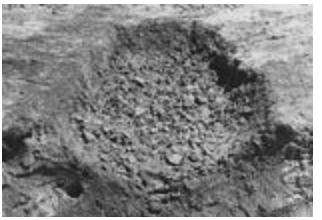

図222　製塩遺構　製塩土器片が敷き詰められている　個人提供

図223　製塩土器の破片(上)と器台(下)　器台右端の高さ8.4センチメートル　新潟県教育委員会所蔵

捨てられた、大量の製塩土器片・器台・木炭が層をなしていたが、須恵器・土師器（はじき）は破片が六点しかなかった。これらのことから、出山遺跡では製塩作業が専業的に行われていたと考えられる。時期は、わずかに残された須恵器の特徴から、八世紀前半とされている。

東港の開削で発見された他の製塩遺跡は、畠山佑二氏の立会い調査資料から見て、九世紀半ばごろまでであり、越後で一般的なバケツ状の製塩土器も用いられていた。中央水路で発見されたこれらの製塩遺跡の存続期間は、出山遺跡を含めると百数十年に及ぶ。当時の海岸砂丘は砂丘の成長段階であり、森林が形成されていなかった。海浜には、集落も製塩土器を作る粘土もない。毎年、薪と製塩土器、作業従事者が送り込まれ、製塩が行われたのであろう。神谷内（北区）や赤塚（西区）など海岸砂丘内陸部の集落で土器製塩が行われるようになるのは、九世紀半ばころ、土器製塩が廃れるのは十世紀後半である。